



#28

クライマックス・キヤッツ!

著：藍澤たすく  
イラスト：かもめ遊羽



「ワシを呼び出したのはお前か……」  
凍てつくようなしわがれ声に香田(こうだ)は内心たじろいだ。

「ええ、そうよ……!」

しかし彼女はスカートの裾(すそ)をぎゅつと握りながら、なんとか虚勢(きよせい)を張ってそう応(こた)える。

ここで負けては元も子もない。

一日は目の前の魔法陣(まほうじん)の上に浮かぶ、山羊顔(やまぎがおか)に角(つの)の生えたベタな悪魔(あくま)を睨(にら)みつけながら、言葉(ことば)を接(つ)いだ。

「お、お前は召喚者(しょうかんしや)である私の願いを聞く……のよ……ね?」

言葉の後半(こうはん)に若干(せいくん)弱気(じやくき)な感じが出ているのは一日も自覚(じかく)していた。

何しろ付け焼き刃(つけやくいば)である。

今日(けふ)駅前(きょうま)前でティッシュと一緒に配(く)られていた「サルでもできる悪魔(あくま)召喚術(しょうかんじゆ)入門(にほん)」なるインチキくさい小冊子(せうさくし)に従(したが)って、ダメモトで部屋(へや)の中に魔法陣(まほうじん)を敷(し)き、召喚(しょうかん)の呪文(じゆもん)を唱(とな)えたらこいつが出てきてしまったのだ。青天(せいてん)の霹靂(へきれき)もいところである。

小冊子(せうさくし)には、召喚(しょうかん)した悪魔(あくま)に隙(すき)を見せるとそのまま喰(く)われてしまう的な怖いことも書いてあったので、一日(いちにち)はもう内心(うちしん)ガクブルだった。

「いいだろう……だがお前の願いを聞く為(ため)にはそれなりの代償(だいしょう)が必要(ひつやう)だ」

(キターー!!)

一日(いちにち)は緊張(きんじやう)に身を強(つよ)はらせた。

なんだろう、願いを聞く代わりにお前の魂(たましい)をよこせとか、生き血(いきち)を啜(すす)らせよとか、処女(しじよ)を捧(たも)げよとか、そういうことだろうか。はつきり言ってどれもイヤだ。超絶(じやくぜつ)にイヤだ。

内心(うちしん)、激(げき)しく動揺(どうごう)しながらも、固唾(かたつ)を飲んで一日(いちにち)は悪魔(あくま)の次の言葉(ことば)を待(まち)った。

「——猫(ねこ)に好(す)かれる」

「は?」

「ワシがお前の命令(めいれい)を聞く代償(だいしょう)としてお前は猫(ねこ)に好(す)かれることになる。それでもよいか?」

「猫(ねこ)って、あの猫(ねこ)?」

「そうじゃ」

「ニヤーって鳴(な)いて、毛(け)がもふもふで、肉球(にくきう)がぶにぶにな?」

「それ以外(そこのほか)にワシは猫(ねこ)というものを知らぬ」

なんだそりゃ。

それが一日(いちにち)の率直(そつじく)な感想(こうさう)だった。

でも元々(もともと)犬(いぬ)よりは猫(ねこ)が好きだし、猫(ねこ)に好(す)かれたところで何(なに)の問題(もんだい)もない。というかむしろウエルカムである。

「構(かま)わないわ。猫(ねこ)に好(す)かれても」

「では願いを申(まを)してみよ」

そう言われて一日はたじろいだ。

やがて頬を朱に染め、もじもじとしながら呟く。

「……になりたい」

「なんじゃ。聞こえぬ。もつとはつきりと申せ」

「一条先輩の彼女になりたいー」

一日は自棄気味にそう叫ぶと、すぐにベッドの枕に顔をうずめ、ぶるぶると身悶えし始めた。

よほど恥ずかしかつたのだろう。

「汝の願い、しかと聞き届けた」

「え？」

「明日、お前が告白すればその願いは必ずや叶えられるであろう」

「ほ、本当に!？」

「ただし……」

山羊顔の悪魔の眉間に深い皺が刻まれた。

「た、ただし？」

「猫に好かれる」

それはさつき聞いたつちゅーねん！ と一日は突っ込もうとしたが、そのときはすでに悪魔は消えたあとだった。

「ふ~~~~~」

とりあえず召喚した悪魔が無事帰ったことに一日は安堵した。これで魂を喰われる心配もない。

「……でも、ほんとかなあ……」

一日は魔法陣をなぞりながらため息をついた。

憧れの一条先輩。

テニス部のキャプテンで、生徒会長も務め、学校中知らない者はいないスポーツ万能学業優秀のハンサム・ボーイ。

そんな先輩が果たして自分の告白を受け入れてくれるのだろうか。

考えれば考えるほど弱気になってくる。

「にやー」

そこに香田家の飼い猫であるトラ縞のジゴロウが入ってきた。ジゴロウはすりすりとい日の足にすり寄って甘い声で鳴いている。

「そうだよね、やらない後悔より、やっつけてからの後悔よね。よし、明日は頑張つて告つてみる！」

一日はジゴロウを撫でながら心にしっかりそう誓うのだった。

「一日、早く起きなさいよ、あたしまで遅刻しちゃうでしょー」

「え？ あつ、もう8時!? もー、なんでももつと早く起こしてくんないのよー!」

「もう何回も起こしたわよ！ 毎度のことだけど、あんた、ほんと起きないわね〜」

呆れた様子でため息をついているのは一日の姉・永遠だった。一日と同じ学校なので、いつも一緒に通学している。

「ほら、さっさと着替えて顔洗って！ あと5分以内に支度しなさいよ！」

「え〜、そんな無茶な〜!!」



「ふいつてきま〜す!」

一日はトーストをかじりながら玄関から飛び出した。

「もう一日、みつともないから早くそれ食べちゃいなよ」

「わはつてふわよ〜もぐもぐ」

若干眉間に皺を寄せながら注意する永遠に、一日は面倒くさそうに応える。

「にゃー」

ふと足許から耳慣れた鳴き声があった。

見るとそこには隣の家のミケがいた。

「なに、ミケ？ お前もパン食べたいの？ よし、はい!」

「ちよつと一日、勝手に人ん家の猫にエサやらない方がいいよ。ついてきちゃったらどうするのよ?」

「大丈夫、大丈夫。うふふ、可愛いー」

一日はトーストを食べるミケの頭をふわふわと撫でた。

「ほら、一日! 遅刻しちゃうから早く行くわよ!」

「はい」



「うわっ!?」

角を曲がった一日は思わず声を出して驚いた。

目の前の空き地に20匹ほどの猫がたむろしていたからだ。

「……猫の集会?」

噂には聞いたことがあるが、果たしてこれがそうなのだろうか。記憶が確かならば猫の集会というものは人間に見つからないように深夜にやる……といったようなことを聞いた気がするのだが……。

「ほら、一日、寄り道しないー」

「あ、ごめん永遠姉とわねま、あつ……!?!」

いつの間にか足許に真っ白な猫がすり寄ってきていた。

(――ただし、猫に好かれる)

不意に悪魔の言葉が脳裏に甦った。

「確かにいつもより好かれてるわね……って、えええええ!!」

気がつくとも集会メンバーの20匹の猫、すべてが一日の周りに集合していた。

「ちよっ! 何やってんのよ、一日! 遊んでる場合じゃないでしょ!」

「え? だって、あたしがやってるわけじゃ……きゃあああ!!」

一日は思わず悲鳴をあげた。

近隣きんりんの家の屋根から猫がどどん降りてきている。

まるで降り注ぐふそ猫の雨のようだ。

そして地上に降り立った猫は一匹残らず一日の周りに集まっていく。

やがて一日を中心に200匹ほどの猫が大集合していた。

この町の猫がすべて集まったのではないかという状況だ。

「どどどどどどういうこと?」

「あ、あたしにもわかんないわよー!」

「にゃっ!」

猫の鳴き声の喧噪の中でも、一際大きな鳴き声が響いた。

「ジゴロー!?!」

そう、それは確かに香田家のジゴロウさんだった。

ジゴロウは何やら力強い声でにゃ! にゃ! と一日の周りの猫に指示を飛ばしている。

やがて一日の後ろに五列縦隊できちんと並ぶ猫の行列が出来上がった。

行列の先頭にいるジゴロウはその様子を満足気に眺めると、一日の方を振り返ってにゃあと鳴いた。

「え、つと……なんだか判らないけど、ありがとうジゴロー……!」

ジゴロウは我が意を得たりとばかりに、一日の足にすりすりするのだった。

「あなた、もしかしてそのまま学校入る気……?」  
 「そのまま何も、あたし何もしてないもん……」

結局一日は猫の行列を率いたまま、学校のすぐそばまでやってきていた。これではまるでハーメルンの笛吹きだ。あつちはネズミだけだ。

あと気のせいかな先ほどより猫が増えていようような気もする。

「あたしやだからね、猫まみれの妹と一緒に登校なんて」

「そんなこと言ってもしょうがないじゃないか……あつ!？」

一日は息を呑んだ。

道の向こうにクラスメイトの茅野樹音がいる。

そして彼女もまたその背後に猫の大行列を率いている……!

恋する乙女達は一瞬で理解した。

すなわち、「相手が恋敵である」、という事実を。

「あなたも一条先輩を……?」

「あなたも悪魔を呼び出したのね……」

一日と樹音の間に冷たい空気が張りつめた。

「一日……?」

不安そうに妹を見つめる永遠をよそに、一日の思考回路はフル回転していた。

(きつと樹音もあたしと同じ契約を悪魔と結んでいる……だったら先に告白されたら一巻の終わりじゃない……でも一体どうすればそれを防げるの……!?)

見つめ合ったまま動かない一日と樹音。先に動いた方がやられる……!

やがて異変が起きた。

一日の後ろにいた猫達が次々と樹音の後ろに移動を始めたのだ。

「ちよつと……!」

一日の止める声も聞かず、猫達は次々と樹音の後ろについていく。

思わぬ猫の大移動に登校中の生徒たちから、驚きとも動揺ともつかぬ声があがる。

やがて一日の後ろに50匹ほど、樹音の後ろに500匹ほどの猫の行列が形成された。

「ふ……」

樹音が勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「な、なによ!？」

「まだ判らないの、香田さん？ この猫の数は想いの強さに比例している……つまりあたしの方があなたの10倍は一条先輩を愛しているということよ！」

「なっ……」

樹音の衝撃的な宣告に、一日はがっくりとその場に膝をついた。

確かに一日より樹音の方がより「猫に好かれている」……！

それは事実……圧倒的……圧倒的事実！

「判ったら大人しくそこであたしの告白を見守ることね」

「させないわ！」

一日は立ち上がり、キツとした表情で樹音を睨みつけた。

「あたしは……あたしの一条先輩への想いがあなたに負けてるなんて認めない！ いいえ、負けているはずはないわ！ あたしは世界の誰よりも一条先輩を愛している！」

「にゃー……！！」

ジゴロウが一日の背後で一際大きな鳴き声をあげた。

それをきっかけに猫達が一齐にキラキラと輝いた瞳で一日を見上げる。

やがて樹音の後ろにいた猫達が一日の後ろにわらわらと戻り始めた。

「ちよ、ちよっとお前達待ちなさい！」

樹音の制止も虚しく、今度は一日の後ろに500匹ほど、樹音の後ろに50匹ほどの列が出来上が

る。

「ふっ、どう？ 猫達はどちらの愛が本当に強いか、判ってくれたみたいよ？」

一転、今度は一日が勝ち誇った表情で樹音を睥睨する。

「くっ……こうなったら仕方ないわ……」

「!？」

樹音が鞆からおもむろに何かを取り出す。

それは……マタタビだった！

「にゃー！」「にゃー！」「にゃー！」「にゃー！」「にゃー！」「にゃー！」

今度は雪崩を打って樹音に猫が殺到する。

「こ、こら、お前達待って！ あ、ジゴローまで!？」

あつという間に一日の後ろには猫が一匹もいなくなつた。

見ると、ジゴロウは樹音の持つマタタビにうつとりと顔を寄せている。

「そ、そんな汚い手を使ってあなた恥ずかしくないの!？ 人としてどうなのよ!？」

「甘いわ！」

「!」

「どんな手を使っても愛しい人を手に入れる……それが真の愛だわ！ それができないのは愛が足りない言い訳に過ぎない！」

樹音はまっすぐな瞳で一日にそう告げる。その言葉には一片の迷いもなかった。

「……そう……ならあたしにだって考えがあるわよ……」

一日がゆつくりと鞆に手を差し入れたその時。

「やめないか、君たち！」

「一条先輩!」

一日と樹音僅れの一条豊が不意に現れた。

しかもその背後に大量の猫の行列をとまなつて。

「先輩……」

「まさかそれは……」

驚愕に目を丸くする一日と樹音。

やがて豊はゆつくりと一日の元に歩み寄った。

「えっ……」

あまりの展開に一日は言葉を失う。

これって……これってまさか……。

「香田さん、好きだ」

豊の口から紡がれた単刀直人な愛の告白が一日の心臓を貫いた。

同時に周りの女子生徒達からきゃー! という黄色い歓声があがる。

あまりの事態に樹音は完全に思考停止状態で固まっていた。

「初めて見た日からずっと好きだったんだ。……でもどうしても告白する勇気がでなかった……」

一日は胸の前で手を組んでぎゅつと目を瞑った。

（そうか……そうだったんだ……一条先輩も……一条先輩も……あたしと同じ気持ちだったんだ……!）

「どうか、僕と……」

「はい!」

「どうか、僕とつきあって下さい! 香田永遠さん!」

「はい! っつて、ええ!」

豊の熱い視線の先には、一日の隣に立っていた永遠がしっかりと捕らえられていた。

「……あたしで良ければ喜んで」

「本当かい!? 良かった……良かった……!」

喜色满面といった様子で永遠の手を握る豊。

やがて二人はそのまま手をつないで校舎の方へと歩いていった。

その後続くのは猫の大行列。

一日と樹音の後ろにいた猫達も加わり、それはもう千匹近い数になっていた。



あとに残されたのは呆然<sup>ぼうぜん</sup>と立ち尽くす一日と樹音だけ……。

「コレ、タベル？ ケッコウ、オイシイヨ」

「ウン、アリガトウ」

一日は樹音がそつと差し出したマタタビを口に含<sup>く</sup>んだ。  
それはほろ苦い、失恋の味しかなかった……。

おしまい